

(4)薬物使用・HIV支援における地域連携の明確化

研究分担者：新田 慎一郎(国立精神・神経医療研究センター／特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究協力者：村崎 美和(学校法人北里研究所北里大学北里研究所病院)

山口 正純(一般財団法人博慈会長寿リハビリセンター病院)

曽根 隆純(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

福正 大輔(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

大島 岳(明治大学)

岡本 学(大阪医療センター)

西川 篤郎(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究 要 旨

本調査では、HIV 感染リスクの高いMSMのうち薬物使用経験のある25名の参加者から、薬物使用(薬物使用症)に関連する支援サービスの利用経験と、当事者にとって必要とされる支援ニーズのうち地域社会におけるアンメットニーズについて調査を行った。薬物使用症(精神作用物質の有害な使用や依存など)に関連するメンタルヘルスの専門家による、医療・精神保健サービスの領域における「守秘義務と通報義務」、「医療従事者のスティグマ」をテーマとした講演、グループディスカッションを中心としたワークショップを行い、薬物使用に関連する相談支援における多様な支援ニーズについて意見を聴取した。本調査によって得られた、実際にサービスを利用する立場の当事者からの声を集約し、地域における様々な専門支援における新たな支援の形について、アンメットニーズを具現化していくことが求められる。

A 研究目的

MSM (Men who have sex with men)は一般集団に比べて薬物使用の頻度が高く、薬物使用に関連する因子については国内外の研究で明らかになりつつある。しかし、当該集団における薬物使用に関連した支援ニーズや、地域における支援体制、効果的な介入方法やそれらを支える政策といった社会環境に関する知見は十分に蓄積されていない。

本研究は、HIV 感染リスクの高いMSMのうち薬物使用経験のある当事者PWUD (People who use drugs)が、地域社会においてどのような困難を抱え、どのような支援を必要としているかを明らかにすることを目的とする。研究班により提示された支援プログラム案であるワークショップを通して、当事者の実体験(薬物使用に関連したサービスの利用経験)に基づい

た支援ニーズを集約し、実効性の高い地域支援モデルおよびヘルスプロモーション施策の構築を目指す。

B 研究方法

スノーボールサンプリングにより下記の条件に該当する参加者を募り、2026年3月1日に都内の会議室で、オンラインによる専門家セミナーと現地でのワークショップを行い、終了後に参加者へのアンケートを行う。

対象者の参加基準および除外基準は以下の通りとする。

【参加基準】

- ①薬物使用経験があること。
- ② HIV 感染のリスクが高い性行為の経験があること。
- ③自身の居住地域での活動や支援体制の構築に関心が

あること。

【除外基準】

- ①ワークショップへの参加が過度な心理的・身体的負担になると判断される場合。
- ②同意説明の内容を正しく理解し、自律的な意思決定を行うことが困難と判断される場合。
- ③現在進行中の犯罪行為(薬物の売買や所持、他者への危害等)を助長する目的で参加する場合。

オンラインセミナーは専門家2名によるセミナーを行う。医療・支援における薬物使用に関する法的な取り扱い(相談支援業務における守秘義務と通報努力義務)、医療従事者のスティグマをテーマとする。

ワークショップは以下のテーマで行い、ディスカッション及び付箋を用いた意見交換および意見の集約を行う。

(1) グループワーク1

個人ワークとグループワークとに分け、個人ワークでは「人生グラフ(Drug Use 編)」をテーマに薬物使用に関連した過去の経験(肯定的・否定的側面)について、グループワークでは様々なライフイベント(仕事、家族、性、病気等)をテーマに経験の意味をグループでディスカッションし、深掘りする。

(2) グループワーク2

地域における薬物使用に関連する支援ニーズを抽出するため、「地域に何があれば助かるか」をテーマに各自、付箋に意見を記載し、類似した意見をグループ化して、薬物使用に関連する支援ニーズを集約し、可視化する。

プログラム終了後にアンケートを行い、提示したプログラム案へのフィードバックおよび参加者の感想を収集する。

(倫理面への配慮)

① インフォームド・コンセント

イベント参加申し込みの際の Web 上の申し込み画面および当日の配布資料において、本研究の研究目的、研究への参加が任意であること、無回答・参加辞退による不利益が生じないこと、参加者の個人情報を公表しないことを明記し、参加者の自由意思による同意を得る。

② 個人情報の保護

取得するデータに個人を特定することのできる情報は含まれず、参加者は本名を用いずニックネームで参加することができる。取得するデータは研究代表者・研究分担者・研究協力者によって厳重に管理され、本研究の範囲外で使用することはない。

③ 参加者の安全と心理的配慮

グラウンドルールとして「言いつばなし・聞きつばなし」を基本とし、心理的安全性を確保する。また、過去の体験の想起により苦痛を生じた場合、いつでもワークショップを途中で退席・離脱することができることを事前に周知する。

本調査は、2026 年 2 月にぶれいす東京倫理委員会の審査を受け、承諾された。

C 研究結果

参加申込者は 26 人、当日の参加者は 25 人であった(1 名は参加辞退)。参加者の居住地域には北海道、北陸、関東・甲信越、近畿、九州・沖縄が含まれ、各地方からの参加があった。ワークショップは当日の午前 9 時より開始し、グラウンドルールの説明を行い、午前 10 時からオンライン専門家セミナーを実施した。その後、午後 1 時からグループワークを行い、午後 4 時半に終了した。

オンライン専門家セミナーでは、薬物依存症支援において安心・安全な治療・相談の場を保証するための倫理的・制度的課題について、松本俊彦さん(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部/薬物依存症治療センター)からは演題「通報義務と守秘義務をどう考えるか?」、片山宗紀さん(北里大学医学部精神科学/国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部)からは演題「医療従事者のスティグマを考える～言葉がスティグマを生み出している?～」について講演があり、講演後に参加者と質疑応答がなされた。

グループワーク1では薬物使用に関連した経験の言語化とグループでの共有を目的として、薬物の使用経験をテーマにディスカッションを行った。使用に至る背景やその過程における個人の多面的な経験が共有されることで、既存のステレオタイプに捉われない当

事者主体の視点を整理した。また、後半にテーマ別トークタイムを設け、より少人数のグループに分かれたトークタイムを実施した。各個人の具体的なエピソードやそれに対する感情に焦点を当て、対話を通じた個々の経験の独自性と共通性を深掘りした。

グループワーク2では、地域社会において、支援が行き届いていない「アンメットニーズ」をテーマにグループディスカッションを行った。具体的には、

既存の医療機関、リハビリ施設、自助グループといった枠組みだけでは捉えきれない支援課題や支援ニーズ、新たな支援の形について議論が交わされた。

ワークショップ後の参加者アンケートでは、9割以上の参加者が参加して「良かった」「大変良かった」と回答し、ハームリダクションや、医療現場での通報義務や薬物依存への捉え方の実情を知ることができたこと、ピアとのつながりでエンパワメントされたといった感想が寄せられた。

D 考察

薬物使用(薬物使用症)に関連する支援サービスは、標準化が困難であり、地域によってサービスの分布やサービスに対する信頼性、サービスの質が異なる可能性がある。薬物使用経験のある当事者にとっては、匿名性の担保や個人情報の保護といった観点から、サービス利用時に大きな不安を伴うことが示唆された。さらに、HIV感染リスクの高いMSMの薬物使用に関連する支援領域は、性的健康に関する課題に加え、個人を対象とする医学領域として救急医療、感染症内科や精神科での診療、本人および家族への心理社会的支援、また集団を対象とした公衆衛生学的アプローチ、違法薬物を取り巻く法制度や刑事司法手続き、さらには当事者主体のコミュニティ支援など、多岐にわたる専門領域で構成されていることが明らかとなった。このことから、サービス提供者の視点から捉える縦割りの(専門領域内部の)専門性のみならず、サービス利用者の視点から各領域を接続する学際的で領域横断的な支援体制の構築、統合的・包括的アプローチが必要であることが示唆された。また、ピアワーカーは、当事者のスティグマを和らげ、サービス利用への心理的ハードルを下げるとともに、当事者と専門職との橋渡しを担う存在として、当事者経験に基づく実践知や支

援技術が、今後の統合的支援において重要な役割を担う可能性がある。また、地方では薬物使用(薬物使用症)に関連したサービスの偏在により、社会資源は限定的なものとなるため、アクセシビリティの担保やサービスの充実を図るとともに、スティグマ低減を目的とした幅広い予防啓発活動のさらなる推進が求められる。

E 結論

本ワークショップでは、個人の経験に焦点を当て、またグループワークによって地域社会の支援課題やアンメットニーズについて議論された。参加者間の対話・交流を通じて、現行の支援体制における複数の課題が共有された。特に、HIV感染リスクの高いMSMのうち薬物使用(薬物使用症)に関連した支援においては、多岐にわたる専門領域を横断した統合的・包括的アプローチの必要性が示唆された。今後は、地域における社会資源へのアクセシビリティの向上や、領域横断的な連携、スティグマ低減を目指す啓発活動や、当事者主体のコミュニティ支援の充実が求められる。

F 研究発表

なし

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし